任に起用された。彼にはすでに西洋美術史に関する著述もあったが、更らに研究を深めるため私費留学を希望したもので、申請が許可されて一応文部省在外研究員という肩書が付けられた。彼は大正十三年八月二十八日に出発。イギリス、フランス、ドイツ、イタリアを見学して翌十四年四月十四日に帰国した。昭和五年十二月に講師を解嘱となるが、その解嘱辞令案には「大正十三年九月以来無給」とあり、帰国後発行の『東京美術学校一覧』においても名が削除されているので、渡欧後は授業を行わなかったと考えられる。

### ④ 鎌倉芳太郎の琉球美術研究

鎌倉芳太郎は明治三十一年香川県に生れ、同県師範学校を卒業して本校図画師範科に入学、大正十年三月に卒業した。その後直ちに沖縄県女子師範学校訓導兼教諭兼同県立高等女学校教諭として赴任。そこで琉球美術の研究を始めた。同十二年四月には改めて本校図画師範科研究生となり、従来の研究を纏めて「琉球美術史論」(一)、(二)と題し、『東京美術学校校友会月報』第二十二巻第四、第六号に発表した。それは琉球の歴史の概要と画家の自了について記したもので、論文の最後には近代日本において最初に自了の芸術を嘆賞した人としての、また、琉球美術の最初の研究家としての岡倉天心に対する賛辞が記されている。

こうした熱心な研究が正木直彦に認められ、彼は正木の紹介で東京帝国大学教授の伊東忠太博士の指導を受けるようになり、さらに大正十三年三月三十一日には正木の計らいで本校助手（美術史研究室勤務、無給）となり、また、翌四月には沖縄出張を命ぜられた。彼は伊東忠太と共同研究の名義で啓明会から一ヶ年三千円の補助金を受け（以後二回追加、計一万円）、沖縄に滞在して資料収集等を行い、特に旧首里王府の紺屋を捜し出し、型紙や染手本を集め、また紅型の技法を会得した。翌十四年の春に帰京した彼は本校写真科の一室で資料整理にあたり、同年九月には校内で展覧会を開いて一般の関心を呼び起こした。この展覧会については『東京美術学校校友会月報』第二十四巻第四号に左のように記されているが、『十三松堂日記』を見ると、正木も彼の活動には並々ならぬ関心を寄せていた様子である。

琉球藝術展覽會　伊東工學博士及び本校師範科卒業生鎌倉芳太郎氏の共同研究にかゝる琉球藝術資料の整理略ぼ成りたるを以て、啓明會の主催にて、去る九月五日より三日間本校に於て開會せられたり、當日は伊東博士鎌倉氏採集の藝術資料の外、琉球出身の東恩納、伊波兩文學士の蒐集にかゝる文書、伊東博士採集の生物、植物園栽培の琉球植物までも出陳せられ、殊に鎌倉氏採集の資料は繪畫、彫刻、漆工、陶磁工、染工、織工、刺繍工、金石工の各部門に亘り、採集範圍は琉球本島より八重山群島にまで及び、寫眞並に實物を合せて三千餘種の多數に達し、觀者をして同君の努力の非凡なるに驚嘆せしめたり、尚開會中連日講演及び琉球音樂の實演あつて展觀と相俟つて琉球の歴史、文學、美術、音樂、天産に亘りて琉球の文化及び自然を一擧に了解せしめられたり、三日間の來衆凡そ五千名に上り近時稀なる盛會なりき。

同年九月、彼は再度沖縄出張を命ぜられ、沖縄、奄美大島、宮古島、八重山諸島で調査を行い、昭和二年九月、八重山より台湾へ渡り、上海を経て帰国し母校に復職した。その後、昭和五年に講師となり、「風俗史」「東洋絵画史」「東洋彫刻史」等の授業を担当し、同十七年に助教授に任ぜられたが、同十九年の学校改革の際に辞職。苦境の中で工芸作家の道を歩み、昭和四十八年には重要無形文化財「型絵染」保持者に認定される。

### ⑤ 三木栄川の奨学金寄付

大正十三年五月一日、卒業生にしてバンコック在住の三木栄川（本名栄）より漆工科技術奨励のための奨学金千円が寄付された。これまでの奨学金寄附額（巻末表参照）は川端奨学金の千五百円を除いた外は三百円以下であり、栄川の寄付は川端（玉章遺族）家のそれに次ぐ額であった。

三木栄川の名は『東京美術学校校友会月報』の論説欄や通信欄に頻繁に登場する。彼は明治十七年群馬県前橋市に生れ、同四十三年三月本校漆工科を卒業、翌四十四年二月暹羅（タイ国）に渡り、同国宮内省技芸局、宮内省美術局に勤務して宮殿や寺院の室内装飾、諸器物の製作に携わった。その業績は左の叙勲内申案（昭和三年一月本校作成）に明記されている。ただし、この文書には「本内申ニ対シテ叙勲ノ沙汰ナシ」と記入されている。

案

叙勲内申

東京美術學校卒業者　三木榮

右者明治四十三年三月本校漆工科ヲ卒業シ翌四十四年暹羅國ニ渡航シ同年十月始メテ同國宮内省技藝局ニ勤仕シ大正三年四月ニ至リ同國宮内技師ノ本官ニ任叙セラル　爾来勤績シテ今日ニ逮ビ前後通ジテ十七年間ノ久シキ同國ニ在留シ其間職務ニ勵精盡瘁シ暹羅宮殿寺觀等ノ装飾ヨリ皇室寶藏物、調度品等ニ至ルマデ一切ノ髹漆螺鈿ニ関スル修繕、新作、意匠考案等ヲ擔当シテ多大ノ功績ヲ擧ゲ同國皇帝ノ寵任ヲ荷ヒ朝野人士ノ信望ヲ厚フシ大正十三年一月一日ヲ以テ同國ノ勲五等ニ叙セラレ王冠章ヲ授與セラレタリ此外同人ハ勤務ノ餘力ヲ以テ夙ニ日暹両國間交通史ノ資料及暹羅美術工藝ノ蒐集研究ニ専念シ「日暹史話」「暹羅ノ美術工藝研究」外數種ノ述作編纂アリテ其文献上ニ裨益スル所亦尠カラズ　又母校タル本校ニ對シテハ其ノ暹羅ニ於テ蒐集シタル美術工藝品ノ参考資料トナルベキモノ多數ヲ送付シ来リ寄附スルコト前後數回ニシテ絶エズ　就中大正十三年ニハ現金壱千圓ヲ寄附シテ本校生徒ノ奨学資金ニ供シ昭和二年ニハ暹羅古代佛畫佛像等六十七点評價壱千圓餘ニ上ルモノヽ寄附アリ　是尤モ著シキモノナリ

以上概述セシ所ノ如ク同人ガ暹羅國宮内技師トシテ盡瘁シタル功績ハ既ニ同國ニ於テ勲五等ニ叙セラレタル事實ニ徴シテ著明ナルベク延イテハ多年ニ亘リ直接間接ニ日暹両國親善ノ隣誼向上ニ與カリテ補翼貢献シタル功勞モ亦尠ナラザルベキヲ察知シ得ル所ナリ　同人ノ如キハ實ニ海外ニ於ケル邦人成功者ノ一人ニシテ且模範的人物トシテ啻ニ本校ノ聲名ヲ海外ニ播スルノミナラズ又暹羅ニ於ケル一般在留邦人ノ為ニモ重ヲ致ス所アルヲ疑ハズ　右ノ次